

花火

東京都・27歳・団体職員

岸本尚美

あの日あなたと一緒に観た花火は、今まで観た中で一番綺麗だった。でも、もうずっとずっと前のこと。

いつも一緒だった。いろんな所に行ったね。いろんな話したね。いろんな悩みも相談し合った。家族のこと、仕事のこと、そして恋のこと。あなたは私の良き理解者であり、良き相談相手だった。もしあの日あなたと花火を観に行かなければ、ずっとずっと友達でいられたのに。恋の苦しみ知らずに済んだのに。

花火が観たいと夏中ずっと騒いでいた私に、あの日あなたは急に「花火を観に行くか？」と誘ってくれた。浴衣を着て駅のホームで待っている間、何故かドキドキしたのを今でも覚えてる。普段下駄なんて履かない私を横目に、何気なく歩調を合わせてくれたあなた。ちゃんと気付いていたよ。

そう、いつもあなたは優しい人だった。

大輪の花火、心に響く音。気が付くと私たちは花火に見入っていたね。帰りの人込みの中で押し潰されそうな私をずっとあなたが守ってくれた。いつも私を女の子として扱ってくれたことなんてなかったあなた。だから異性として意識したことなんて一度もなかった。でも、あの瞬間私の中で何かが弾けた。そしてどんどんあなたへの想いはふくらんで、私の心は破裂した。友情と恋愛、どちらをとるかあなたに全てを任せた。

そしてあなたは、「ずっと友達でいよう」と私にそっと告げた。どうしてあの時私はそんなあなたに背を向けてしまったのだろう。恋に破れ、そして同時に自らの手で友情も壊してしまった。

そんなあなたがとうとう結婚するのですね。あれから随分時が経ち、私も愛する人ができました。あなたのこと、やっと思い出にすることが出来ます。そんな今だからこそ、心からおめでとうを送ります。あの時ちゃんと伝えられなかった「好きです」という言葉と一緒に。

※とても大切な友人です。今でも、そしてこれからも。